



景德鎮が世界遺産に！ 中国・上海の文化遺産

「陶磁器の都、景德鎮が、ついに世界文化遺産へ！今回は、中国各地の世界遺産をたどりながら、上海で登録を目指す文化資産や、今も暮らしの中に息づく無形文化遺産を紹介する。



新華社



新華社



新華社

7/25に決定！ 景德鎮が世界文化遺産に

今回登録されたのは、街全体ではなく「景德鎮手工磁器産業遺産」。10～19世紀に発展した窯跡や陶土・燃料の産地、運搬網など45カ所からなり、原料採掘から生産、流通まで続いた磁器産業の全体像が評価された。青花磁器を通じ、世界の技術や文化交流に影響を与えた点も登録理由だ。

中国の世界文化遺産 計42件

- ・万里の長城 (北京市ほか／1987年)
- ・明・清王朝の皇宮群 (北京の・故宮・瀋陽故宮) (北京市・遼寧省／1987年、2004年)
- ・秦始皇帝陵及び兵馬俑坑 (陝西省／1987年)
- ・莫高窟 (甘肅省／1987年)
- ・ラサのポタラ宮歴史地区 (チベット自治区／1994年ほか)
- ・蘇州古典園林 (江蘇省／1997年、2000年)
- ・麗江旧市街 (雲南省／1997年)
- ・杭州西湖の文化的景観 (浙江省／2011年)



中国の世界自然遺産 計15件

- ・九寨溝の景観と歴史地域 (四川省／1992年)
- ・黄龍の景観と歴史地域 (四川省／1992年)
- ・武陵源の景観と歴史地域 (湖南省／1992年)
- ・雲南三江併流保護区 (雲南省／2003年)
- ・四川ジャイアントパンダ保護区群 (四川省／2006年)
- ・中国南方カルスト (雲南省・貴州省・重慶市・広西チワン族自治区／2007年、2014年)
- ・中国丹霞 (広東省・福建省・江西省など／2010年)
- ・新疆天山 (新疆ウイグル自治区／2013年)



力になる。世界遺産は、登録数を競ったり、写真を撮って通り過ぎたりするための称号ではない。何かが人類共通の価値として認められたのかを知って歩けば、遺跡や風景の見え方も変わる。見学ルールを守り、地域の暮らしや文化に配慮し、地元の手芸やサービスを利用する。観光の楽しさを保護と地域の利益につなげる

価値を知って巡る世界遺産 景德鎮の登録により、中国の世界遺産は計61件となった。これは62件のイタリアに次ぐ世界2位で、世界的に見ても極めて多い。万里の長城や故宮のような名所だけでなく、自然、都市、産業、暮らしなど、多様な価値が広大な国土に残されていることの表れでもある。

ユネスコ世界文化遺産に新たに登録された「景德鎮手工磁器産業遺産」。対象となったのは、完成した磁器や有名な窯だけではない。原料の採掘・運搬から、窯の改良、職人や商人の組織、生産、流通まで、10～19世紀に築かれた磁器産業の全工程だ。5つの区域に残る遺跡群が、千年にわたり続いた巨大なもののづくりの仕組みを今に伝える。現地を訪れるなら、市街地の陶陽里にある御窯廠窯跡を起点に、職人街や工房、商業の跡を歩きたい。さらに湖田古窯跡では窯業技術の発展、高嶺のカオリン鉱山跡では原料が採掘・加工され、街へ運ばれた過程をたどれる。一つの名品を眺めるだけでなく、一握りの土が世界の商品になるまでを追うのが、今回の世界遺産らしい楽しみ方だ。

磁器の都・千年の全工程



上海の世界自然遺産 崇明区東灘

2024年、崇明東灘は「中国黄（渤）海候鳥栖息地」の構成地域として登録。長江河口に広がる干潟と湿地は、東アジアーオーストラリア間を移動す

る渡り鳥の重要な中継地で、渡り鳥のガソリンスタンド、とも呼ばれる。多くの希少種を支える、上海初の世界自然遺産だ。

目指せ！世界遺産

上海市は「上海 2035」で、2035年までに市内で2件以上の世界文化遺産を持つことを目標に掲げている。登録を見据え、保護や調査、研究を進める主な文化資産はコチラ。

- ・江南水乡古鎮
- ・外灘建築群
- ・老城廂
- ・石庫門
- ・里弄住宅
- ・青龍鎮などの関連遺跡



上海の無形文化遺産

ユネスコの世界遺産とは別に、中国には伝統芸能や工芸、食文化などを守り、次世代へ伝える「非物質文化遺産」の制度がある。上海にも国家級・市級の項目が数多く、街の暮らしや職人の技の中に今も息づいている。

- ・江南絲竹
- ・滬劇
- ・顧繡
- ・嘉定竹刻
- ・南翔小籠饅頭制作技芸



味わえるのが、技や芸能、食を受け継ぐ無形文化遺産だ。江南絲竹の音色、上海語で演じる滬劇、糸で絵画を表現する顧繡、繊細な嘉定竹刻、南翔小籠饅頭の制作技芸など、その種類は実に多彩。展示を見るだけでなく、舞台を観たり、工房を訪ねたり、実際に食べたりできるのも魅力だ。都会的な街並みの奥に息づく、生きた遺産を知れば、上海の見え方も少し変わってくる。

一方、より身近に中国らしさを味わえるのが、技や芸能、食を受け継ぐ無形文化遺産だ。江南絲竹の音色、上海語で演じる滬劇、糸で絵画を表現する顧繡、繊細な嘉定竹刻、南翔小籠饅頭の制作技芸など、その種類は実に多彩。展示を見るだけでなく、舞台を観たり、工房を訪ねたり、実際に食べたりできるのも魅力だ。都会的な街並みの奥に息づく、生きた遺産を知れば、上海の見え方も少し変わってくる。

形なき文化と上海らしさ

世界文化遺産についても、上海市は登録に向けて動き始めている。「上海2035」では、2035年までに市内で2件以上の世界文化遺産を持つことを目標に設定。江南水乡古鎮や外灘建築群、老城廂、石庫門、里弄住宅、青龍鎮などを対象に、建築や街並みの保護、遺跡の調査、歴史的価値の研究を進めている。都市開発と地域の暮らしを守りながら、上海らしい文化をいかに未来へ残すかが課題だ。

上海にも世界遺産はある

北京や西安のような古都と比べ、近代以降に急速な発展を遂げた上海には、王宮や巨大遺跡といった古都型の世界文化遺産がまだない。しかし、世界遺産がつもるわけではない。2024年、崇明東灘が「中国黄（渤）海候鳥栖息地」の構成地域として登録され、上海初の世界自然遺産が誕生した。

高層ビルが並ぶ大都会から少し離れた長江河口には、広大な干潟と湿地が広がる。ここは東アジアーオーストラリア間を移動する渡り鳥が、羽を休めて栄養を補給する重要な中継地。希少な鳥や生態系を守る場所として、上海が自然保護の役割も担っていることを教えてくれる。